

日本でもできないか



松原 谷川 久明

十五年間のロータリアンの日々を送り、私は最近ようやく、シニアの仲間入りをしました。

私は昨年十一月、商用で渡米した際、かつての交換学生プロジェクトで交流のあった人とロスアンゼルスで旧交を暖めました。そこで聞いた興味ある話をお伝えします。

その内容は、その規模の大きさと奇抜さにおいて、日本人ロータリアンにとって驚くべきものと存じます。

ALL PILOTS, PERATION THANKSGIVING なる活動がそれですが、目的は、感謝祭の休日を利用して、ロータリアンや企業から寄贈された食品、衣料品、医薬品などを、メキシコのクラブを通じて、同国の貧しい人々にプレゼントをするという、世界社会奉仕の実践にあります。ちやうど、その活動が私の訪問した十一月だったわけですが、協力参加は五二八地区ほか二地区所在の二十四クラブ（提唱はハンティングトン・パークRC、ロス市の東隣の市）ということでした。

実施されましたのは十一月二十八日の午後から二十九日にかけてですが、参加ロータリアンが約八十人、それで三十五機の飛行機（私有、

操縦者もロータリアンの場合が多い）に品々を積んでメキシコに飛んだのです。

飛行機を使うのですから、大がかりになりませんが。ロスアンゼルス近郊には、飛行調整センターが三カ所も設けられ、また、メキシコまでの途中には、緊急避難用の飛行場も準備されました。着陸地のティファナ国際空港が、天候の変化で、着陸不可能のときは、メキシコ国際空港へスイッチする手はずを整えなければなりません。さらには、飛行中の緊急通信用の電波帯、飛行機の登録証、飛行免許証、旅券、出生証明書、メキシコへの飛行許可証、活動が終るまでの保険証書、交換用のクラブバナー等々、その準備は万端にわたります。

私が驚いたのは、一機や二機ではなく、三十五もの飛行機をとばすというスケールの大きさもそうですが、大都市近郊のクラブが提唱し、その善意が近隣クラブの共鳴を呼び、このような大きな規模の活動に発展したことです。

これが、地区ガバナーの提言や要請で行われたものではないところに、私は、国際ロータリーの活動のほんとうの在り方が、あるようにおもえるのであります。

初めての一昨年より昨年のほうが、だんぜん参加者が多いとも聞きました。日本でも、飛行機とはいかないまでも、隣国韓国へ小型船舶で船隊を組み、救援品を運ぶくらいの世界社会奉仕をする地区や、クラブが出現してもよいと願うものです。

（第二六四地区 大阪府 自転車製造）